



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2010

vol. 04

こんな時代に「キャンパス」に 求められるもの

教育推進部 副部長 橋寺 知子
環境都市工学部 准教授

一昔前は講義に出ないと、少なくともノートを購入しないと単位は取れませんでした。情報=書籍の時代、図書館は大学の象徴でした。今はポケットの携帯電話でもあらゆる情報が得られ、海外の大学の講義でさえ、ネットやテレビで視聴できます。こんな時代に大学へ、わざわざ通う意味はあるのでしょうか。

大学に求められるのは情報の集積だけではありません。友達、先生との出会いがあり、同窓生同士の時空を超えた関係を取り持ってくれます。もう一つ、「居場所」となることです。人間の心は場所の雰囲気によって左右されるもので、自室より図書館の方が勉強がはかどったり、木陰や狭いカフェのテーブルの方が議論が盛り上がりやすくなります。キャンパスには、居場所にふさわしい、魅力ある空間が求められます。

今春、フィンランドの大学施設の視察の機会を得ました。教育世界のフィンランドは、少人数教育などのい

ろいろな工夫があります。施設は広々としてメンテナンスが行き届いていますが、ごく普通の印象です。でも、新旧さまざまな時代の建築を改修しながら使い、要所に学生にも職員にも居心地の良さそうな空間や、絵になる場所があります。アールト大学経済大学では築60年の美しい講堂を大事にしていました。日常的に多人数講義に使い、入学式など大事な式典の場にもなります。家具や照明器具、布張りの椅子の色は昔と変わらないそうで、大学の歴史や品格を暗示しています。背筋が伸びる適度な緊張感、落ち着き、暖かさ、懐かしさなど、人々の心に何かを残す空間です。

関西大学の4つのキャンパスにはそれぞれの歴史と個性があります。「コンクリートから人へ」、ハコものは敬遠される時代ですが、歴史を物語るストックも活用しながら、居心地のよい空間を創ることは、案外直接的な学びの支援なのかもしれません。

フォーラム・セミナー報告

第3回関西大学FDフォーラム 対話で育てる「論理的思考」を開催しました

「論理的思考」や「批判的思考」は、いわゆる「ジェネリック・スキル」や「キー・コンピテンシー」と呼ばれる基本的な能力のひとつに数え上げられることが多く、欧米の大学では特にその育成に強い重点が置かれています。日本でも、その必要性和重要性はしばしば指摘されていますが、積極的に意見を述べることも、協調性や謙虚さを美德として評価する傾向の強かった日本の文化的土壌にあっては、論理的思考や批判的思考を育成することは難しいとされてきました。そうした事情もあって、「論理的思考」や「批判的思考」には、敷居が高い、固くて難しい、といったイメージがつかまっています。

そこで当センターでは去る7月10日(土)、できるだけ身近に、楽しみながら論理的思考・批判的思考を育てるメソッドを紹介す



教員、職員、学生が幅広く参加

るため、ワークショップ形式のFDフォーラムを開催いたしました。ワークショップのファシリテーターは、コミュニケーション学と教育工学をご専門とし、既に当センターの専門委員としてご協力いただいている牧野由香里教授(総合情報学部)です。牧野教授が開発された「十字モデル」を体験していただくことが、今回のフォーラムの中心となりました。

「十字モデル」のワークは、「ディベート」のような固い議論とはひと味違い、「対話」や「物語」をベースとする「やわらかい議論」を通じて、話し合いの筋道を可視化・構造化できるという特徴があります。ワークの中で、参加者たちの論理的思考を自然に促すようデザインされているのです。また「十字モデル」は、そこに安心して参加できる対等な場作りを支援する、という機能も持っています。参加者たちが対等に議論に貢献でき、また、お互いに安全な状況でコメントしあえるよう工夫されているので、相互のコメントを経由しながら参加者の批判的思考を育むことができます。

2時間30分にわたったプログラムは、牧野教授による「十字モデル」の解説と、実際に「十字モデル」を用いたのワークショップからなり、ワークショップでのディスカッションは、「電子書籍」をテーマにグループ単位で



ファシリテーターの牧野由香里教授

行われました。電子書籍は、KindleやiPadなどの登場によって今まさにブームを迎えようとしているタイムリーな分野であるということもあって、各グループのディスカッションは、和気あいあいとしながらも熱の籠もったものとなったようです。

高等教育の現状の中で、いかにして論理的思考や批判的思考を育成してゆか、は今後も大きな課題でありつづけるでしょう。しかし今回のフォーラムによって、ご参加下さった方々がこの課題に応じてゆくためのなんらかのきっかけが得られたとしたら幸いです。当センターでは、今後も先生方のニーズに即したフォーラムを開催してゆきたいと考えております。ご要望などございましたら、どうぞお気軽にセンターまでお寄せ下さいますようお願いいたします。

(教育推進部助教 須長一幸)

FD Café the 2ndを開催しました

9月9日に第二回新任教員研修会(FD Café the 2nd)を開催しました。コンセプトは前回と同様、Facultyづくりを目指した「共有」です。

授業をよりよいものにするためのヒントやアイデアは国内外を問わず、いくつかの大学において数多示されてはいますが、それらが必ずしも有用であるとは限りません。何故なら、それはある一定の文脈を背景あるいは下地として作られたものだからです。さらにそのヒントやアイデアは文字情報として得られるばかりだからでもあります。

わたくしたちの授業をよりよいものへと進化させるためには、そのような借り物に頼るのではなく、わたくし自身の手と頭をつかっただけのものを編み出さなければなりません。つまり、わたくしたちの現場、実情から出発する必要があります。それが、大切な「何か」を共有すること、あるいは共有できるという予感を持つことにつながると考えるからです。

したがって、会の開催に当たってはテーマを企画サイドがあらかじめ設定してから参加者を募るという手順を踏みませんでした。今回は春学期を終えた新任の先生方が授業においてどのような苦勞をされたか、いかなる工夫を試みたのかなどについて事前にお知らせ頂いた上で、多くの方に共通すると思われるテーマをその中から選定することにしました。取り上げるべき課題は多数ありましたが、諸事情を勘案した結果、「学生の私語について」ならびに「ワークショップ形式の授業運営について」を参加者による対話(ダイアログ)の中心的テーマとしました。

先に紹介したようにコンセプトは「共有」ですが、それは例えば私語対策やワークショップの効果的運営方法のマニュアル化を意味するものではありません。一人ひとりから報告された苦勞や工夫を参加者はそれぞれの文脈において理解し、それを基



情報共有を行う新任教員

軸として展開したダイアログの中で自身にとってのアレンジの可能性を探し、あるいはその可能性についてのコメントを求めると、さらに参加者の誰がどんな可能性を模索しているのかをそれぞれが確認し、それを自身のケースに引きつけて考えながら、「何か」を見つけられるようにすること、そのことにこそ意味があると考えて、今回はオープンエンドのスタイルを採りました。

できることならば年度内に第三回目の開催を企画したいと考えております。今までにご参加されなかった方でも、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

(教育推進部教授 三浦真琴)

ワークショップ参加者報告

FD Café 2ndへ参加して

社会安全学部 准教授 中村 隆宏

本学への赴任前は、とある研究所で安全に関わる業務に従事していた。現場の最前線を担う方々と安全教育のデザインや実践も何度か手がけ、教育のノウハウは理解していた…はずだった。

ところが、大学というところは厄介なのである。現場に慣れ親しんだ身にとって、教

室という環境で相手（=学生）の反応は把握しにくく、授業でも何をどう話していいのやら見当がつかない。いくつか「お作法」があるようだが、誰も手ほどきなどしてくれない。自分なりに突き進んでも良いが、それも心許ない。というわけで、4月に引き続き、2度目のFD Caféへの参加となった。

しかしFD Caféでは、各教員が抱える様々な課題の解決方法を具体的に示してくれる訳ではない。一方で、dialogueを通

じて多様な意見に触れるだけでも、自らの課題の現状と経緯を把握するのに役立つ。早々に結論に達してごんまりと纏まるよりむしろ、視野を広げて全体像を描き課題を捉え直す方が、何かと融通が利いて都合が良いらしい。

現場で抱える課題を解決する糸口は、机上ではなく現場で探すのが良策である。FD Caféは、私にとってその糸口を探す好機の一つとなる。

ワークショップ型TA研修を実施しました



意見交換の様子

9月17日にTA研修を開催しました。秋学期は43名のTAが授業で活躍することになっており、学会等での欠席がありました。約30名が研修に参加しました。またTAを活用する3名

の先生方もご出席くださいました。

研修では、TAの活動内容や抱えている課題に即した内容を取り上げるため、夏休み期間中に6名のTAにヒアリングを実施しました。ヒアリングを通じて、TAはより質の高い活動をしたと考え、教員からのアドバイスを受けながら、授業方法の改善策や学生との接し方などを自分なりに省察し、改善していることがわかりました。こうした改善策は、授業内での実践や経験を基としており、教員からの指導も受けているため、有益だと考えられますが、現状ではそれがTA個人の知見としてとどまっている状態でした。

そこで、研修では「TAが授業を通じて導き出した工夫や改善策を共有し、TAがさらに質の高い活動を実施していくための機会」を提供することにしました。加えて、大学の置かれている現状や高等教育政策について学ぶ機会を設けました。

まずは、ミニレクチャーとして、アウトカム評価や分野別質保証について解説をし、そこでのTAの役割について話しました。

次に、TA活動における工夫を共有するためのワークショップを行いました。TAは教材制作グループ、学生の議論を支えるグループなどに分かれ、活動の現状を報告し合い、他のTAと業務内容を共有しました。その後、「学生から話しかけられる、相談を受ける関係性を作るための工夫」「学生の考えを引き出すためにしている配慮や工夫」などについて議論をし、最後に、グループで話し合った内容を全体に報告し合いました。

TAから報告されました学生を支援するための方策をいくつか紹介させていただきます。

①学生と関係性を作るための工夫

- 学生の名前、得手/不得手な分野、授業への参加態度などを把握し、必要に応じて個別に話しかけ、学生の授業への動機づけや参加態度の向上、成績の向上に役立てる。
- 教員に学生の理解度や参加度を伝えて、学生個別の情報を提供し、学習者の支援を行う。

②学生の考えを引き出すための配慮や工夫

- 学生と対話する際、例をあげて考えさせたり、学生の意見を導き出した理由について問うたりするなどして、学生が自分の考えを整理、精緻化させるようにする。
- 学生の資質や学力に応じて厳しい質問をしたり、スモールステップで質問したりするなど、学生の個性を重視した教育を提供する。

③いかに授業に興味を持ってもらうかに関する配慮や工夫

- 学生の授業への関心を高めるための方法として、補助教材の作成や学習到達目標の設定を提案する。

しかし、議論では、一部の学習意欲の低い学生への対処に戸惑いを感じているTAがあり、その対応に懸念している現状が伺えました。今後対応策を共に検討していきたいと考えております。

今回のTA研修は、継続年数の長いTAを交えて、現場のニーズに応じた研修を企画・実施していきたいと考えています。TAを活用されている先生方からご意見・ご提案がございましたら、ciwasaki@kansai-u.ac.jpまでお願いします。

なお、当日の詳細なプログラムやTA研修のアンケート結果に関しては、「岩崎千晶のつれづれ日記2 (<http://d.hatena.ne.jp/kandaictl/>)」のカテゴリー「TA制度」にて公開しています。ご覧ください。

(教育推進部助教 岩崎千晶)

教育開発支援センター

活用案内 **CTL**

教育開発支援センターでは、高等教育に関する様々な書籍をご用意しております。市販の図書に加え、各大学の紀要や報告書等も充実しております。閲覧・貸出は自由ですので、お気軽にお越しください。ご推薦頂ける書籍等も随時受け付けております。教育開発支援センター（千里山キャンパス第2学舎1号館1階）までお気軽にお問い合わせください。

書籍紹介（いずれも貸出可能です）

- 『リーディングス 日本の高等教育① 大学への進学 選抜と接続』 中村高康(編) (玉川大学出版部)
 『リーディングス 日本の高等教育③ 大学生 キャンパスの生態史』 橋本鉦市(編) (玉川大学出版部)
 『リーディングス 日本の高等教育⑤ 大学と学問 知の共同体の変貌』 阿曾沼明裕(編) (玉川大学出版部)
 『大学破綻 一合併、身売り、倒産の内幕』 諸星裕(著) (角川書店)

SA活動報告

「私のSA経験」

法学部4回生 吉田 達哉

私達学生は普段、大学のなかで授業を受ける受動的な立場です。

中には、授業よりもサークル活動やアルバイトなどに熱心な学生が少なからずおり、実は私もその1人でした。

しかし就職活動を目前に控え、そうした態度をまず改めたという思いからSA (student assistant) になりました。SAは教員の授業運営を様々な面でサポートし、負担を減らすことで授業に集中できる環境作りをします。初めのうちはただ、指示されたことをこなすだけでしたが、次第にSA活動をよりよくしたいと思うようになりました。職員の方は、SAの意

見に対して積極的に耳を傾けてくれるので、何でも提案しやすいです。例えば、より効率的な采配方法や、SA同士の自主練習会の実施などは、SAの提案により実際に導入されたことです。

また、SA業務の中で寝ている学生や携帯電話を触っている学生を見ると、それまでの自分の授業態度に問題があったことに気づくことができました。授業態度の良い学生を増やせないかと思うようにもなりました。

今後はSAとしての視点から、学生がより積極的に授業を受け、教員がより授業を実施しやすくなるような環境作りが目標です。こうした視点は、SA経験を通じて初めて持つことができました。SAも学生生活も残り少ないですが、この視野をより広め将来の自分の力にしたいと思います。

From

センター長

FD活動は「倶楽部」活動?!

FD関連の機構やセンターの長という立場におられる先生方にとっては、大学間連携を行っている機関や他大学が主催するFDに関連する講演会・フォーラム・ワークショップ等に参加する機会は、かなり頻繁なのではないでしょうか。私自身そのような会に参加する機会が、センター長に就任する以前に比べるとかなり多くなったように思われます。

そんな私が、FDに関連する会合に参

加するたびに感じていることは、顔見知りの先生方や職員の方々ばかりにお会いするという事です。もちろん私自身も、他の参加者の方々から「あ、また会った!」、「あ、また来ている!」、「今日も居る!」等々、内心想われている一人であろうと確信しております。教育改善に強い関心を持つ方々が集うわけですので、このように毎度顔なじみのメンバーが揃うのは当然のことかもしれません。しかし、果たしてこれ

でよいのでしょうか。高等教育におけるFD活動が、ごく一部の人の集う「仲良し倶楽部活動」では少し困るような感じます。やはりFD活動は、オープンでかつ魅力溢れる楽しい“サークル活動”でなければならないのではないのでしょうか。そのための仕組み・仕掛けを模索するのがセンターの役割だと感じております。何か佳いお知恵がございましたら、是非とも当センターまでご一報いただきたく思います。

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授 池田 勝彦